七座山

七座山は、1,300 年以上にわたって、地元の神様として崇拝されてきた。地元の言い伝えによると、山は眠っている龍であり、その 7 つの峰は龍の背中の骨ばった角である。 七座という言葉は「7 つの座」を意味し、別の言い伝えでは、その名前は、日本神話において世界が創造された後に現れた 7 代の神々に由来すると言われている。山は今日でも二ツ井の一部の住民によって崇拝され続けている。七座を形作っている山の尾根は、米代川の水路を分断し、龍の頭の周りを大きくうねっている。

1788 年、京都大火により古都は焼け野原となった。その際、秋田の木材が京都に出荷され、再建に使用された。これにより米代川周辺の原生林のほとんどが切り倒されたが、二ツ井の人々は七座山を神聖な山として保護することにした。それ以来、この山の杉の多くが保護されている。中には樹齢 300 年を超える木もあり、山にはまだこの地域の精神的な伝統が深く織り込まれている。

山にはハイキングコースが設置されており、杉の森を通り抜ける。それらは幅が狭く、豪雨が続いた後に通ると危険な場合がある。七座山の七峰を祀った神社は、一番最後の山のふもとの川沿いを走る道の突き当りにある。